

■研究計画・目的

本研究は、主として 19 世紀に近代国民国家へと国体の在り様を変化させた国家において、それまで独立性の高い領域としてあった地域が、国民国家に包摂されていくなかで、どのように中央政府との関係性を構築してきたか、その際に独自の空間的に範域に対する意識（地域意識）をどのように再現＝表象してきたかということについて、スペイン・バスク地方と日本・沖縄県を事例として比較検討を行うことを目的とする。国境線で閉じられた領域を前提とする国民国家（nation-state）という国家形態は、それ以前には開かれていた、後に統合され中央からみれば「周縁域」に位置付けられるようになるこうした地域の国境線をも閉じることとなった。かつての開放的な政治・経済的諸活動が切断され、新たな中央政府の支配下で管理されるようになっていったのである。沖縄県を見れば分かるように、1879 年の「琉球処分」（廃藩置県）以降、中国との冊封・進貢関係が廃止され、形式的にも実質的にも中国との関係は消滅することとなった。東京から見れば遠隔の地であり、国土の周辺に位置するものと認識されるようになり、それまでの独自の文化は周縁的なものと見做されるようになった。

他方、バスク地方もスペインという近代国家においては、国土の周縁域に位置するところとなったが、歴史的経緯や資本的・産業的な蓄積が豊富であったので、カタルーニャと同様、単純に沖縄県と比較することは出来ない。ただ、強国の間にあって、フエロといういわば地域特権（主権の担保・税の特権・徴兵回避）が中世以来認められてきたが、それを維持できるかどうかで、数次にわたるカルリスタ戦争が 19 世紀に、20 世紀にはバスク・ナショナリズムが高揚することにもなった。地域意識の強さと、権利剥奪をめぐる地域内での葛藤などは、琉球＝沖縄と比較するに値すると考えた。

■研究活動

当初はアメリカ合衆国・ハワイ州も併せて調査を行う予定であったが、コロナ禍の時期と重なったこともあって、2 国のみに予定を変更した。期間の前半はスペイン・バスク地方で調査・研究を行い、後半は日本（沖縄・東京）で調査・研究を行った。バスクでは、ビルバオ近郊のゲルニカのさらに近郊のエアという集落に滞在し、参与観察的に当地で暮らす住民と交流を持って現地の様子を調査したり、バスク地方内の各地（ビルバオ、ビトリア、パンプローナ、サン＝セバスチャン、バイヨヌス、レケイトウ）、また近隣諸地域（ログローニョ、サンチャゴ・デ・コンポステーラ、ラ・コルーニャ）を踏査し、当地の様相の把握に努めた。バスクを含むスペイン北部は、アストリアス、カンタブリア、ガリシアと地域性の濃い地域から構成され、スペインの他の地域と比べて、面積は小さいが、独自の文化を誇るところでもある。

東京や沖縄では、図書館（明治大学図書館と沖縄県立図書館）等での資料調査を主として行った。とりわけ明治後期から大正年間、昭和のアジア太平洋戦争前後までの時期を対象とし、新聞記事や各種資料の他、とりわけ写真の収集に努めた。景観の記録として、実に多く

の情報を有しているからである。社会教育、とりわけ青年団活動が、地域の景観形成に果たした役割を中心に調査を行った。

■研究成果

スペインと日本という国民国家の、国土的には周縁域に属するバスク地方と沖縄県の地域意識発現に関する調査は、現地での空気を感じつつ行うことが出来たので、文献や資料からだけでは知り得ない多くの知識と経験とをもたらしてくれた。

まず、バスク地方はフレンチ・バスクも含むピレネー山脈の南北に広がっており、七つの地域（ビスカヤ、アラバ、ギプスコア、ナヴァラ、ラプルディ、ナファロア・ベヘレア、スベロア）から成っているという認識があることを知ったことが大きかった。スペインとフランスの国境を跨いで同じバスク民族であるという意識が強くあるということである。バスク地方ではスペイン国旗がたなびいている光景を見ることはめったにない。目にするのは緑と赤と白のユニオンジャックのような柄のバスクの旗（イクリニャ）である。これは到る所で眼にした。また、駅やバス停など、地名は必ずバスク語とスペイン語の両言語表記となっていた。バスク語が優先的に表示されることも多く、公共交通機関を利用する際、行き先を確認するのに手間取ることも儘あった。報告者が滞在したのはビルバオの東にある、ゲルニカのまたその東に行ったエアという集落であったが、そこはバスク地名ではドニバネといった。とはいえ、彼らは日常的にバスク語ばかりを使用しているわけではない。スペイン語話者でもあり、日常的にはバイリンガル状態で、文脈によって勝手に使い分けているとのことである。

なお、バスクと一括りにされてはいるが、その中での地域差にも留意しなければならない。海岸部のビスカヤとギプスコアは共通性が多いが、ビルバオを中心とするビスカヤは、バスクの中で圧倒的な人口数を誇り、製造業（随分斜陽となったが…）をはじめ金融・サービス業が発達している。ギプスコアの中心地はサン＝セバスチャンであるが、ここはスペイン有数のグルメ観光地である。

サン＝セバスチャンはフランス国境にほど近い。そこから高速バスで簡単にフレンチ・バスク（北バスク）に行くことができる。北バスクの中心地の一つがバイヨンヌである。バイヨンヌには2日しか滞在できなかったが、耳にする言葉はフランス語で、バスク語を聴くことはほとんどなかった。フランスの方がスペインより国民国家への同化が進んでいるものと思われる。

内陸部のアラバは南バスク3県の首都であるビトリア（ガステイス）が、バスクの立法・行政的中心となっている。さらにその東、ピレネー山脈の南麓に位置し広大な面積を誇るナバラは、パンプローナを中心地としている。ナバラは歴史的経緯から同じバスクではあるものの南3県とは若干立ち位置は異なっている。パンプローナは、ヘミングウェイの小説『日はまた昇る』で知られる牛追い祭りで有名な都市である。ワインも当地ではロゼを好み、南バスクが酸味の強い白ワインのチャコリをメインとするのとは異なっている。海産物料理

の多い沿岸部にはチャコリが、肉料理（むろん牛が中心）をメインとする内陸部ではロゼや赤が好まれている。

スペイン最大のワイン産地はアラバの南、ナバラの南西に位置するラ・リオハである。エブロ川沿いにブドウ畑が広がっており、ログローニョが中心都市となっている。テンブラニーリョやグルナッシュ等の赤ワインの産地として知られる。全体にバスク地方において日本人の姿を見る機会は少なかったが、コロナ禍ということは無論あるだろうけれども、ログローニョはある種の（飲）食の都といえるグルメの街となっているので、交通の便宜を図れば、サン＝セバスチャンのように、日本人観光客が好んで行くようになるポテンシャルはあると思う。

この短いスペイン滞在期間にあって、ガリシア地方に赴けたのは幸いであった。フランス側のピレネーの麓から、山脈を越えてナバラに入り、リオハを抜けて、サンチャゴ・デ・コンポステーラに向かう「巡礼の道（エル・カミーノ）」でバスクと繋がっているからである。巡礼の道が出来たからバスクもキリスト教化されたといわれている。

19 世紀になり産業化が進展すると、スペインでも産業資本家の力が強くなってくる。進歩的な都市的勢力と保守的な農村的勢力の対立が顕著になっていくわけだが、スペインの王位継承問題がそれを激化させていった。自由主義的な政策を採るイザベル 2 世と旧来の制度維持を謳うカルロス 5 世。前者は都市部で、後者は保守派と農村部で支持者が分かれた。後者はカルリスタと呼ばれる。前者はフエロ（地域特権）を取り上げようとし、後者それを保持しようとしたので、伝統的にフエロを認められてきたバスクもこの争いに巻き込まれることになった。結局のところ第 3 次カルリスタ戦争の後、1879 年にバスクのフエロは廃止されることになった。これにより、バスクはスペイン国の一領域に定位され、納税・徴兵の義務が課せられることになったのである。また製造業を中心とする産業の発展に伴い、バスクにも多くの地域外からの人口流入がみられるようになった。バスク的生活様式とは縁のない非バスク語話者が急速に増えていくにつれ、バスクの固有性が薄められていったわけであるが、この過程は琉球王国から沖縄県への転換過程と比較出来て興味深い。こうした流れに抗するように、19 世紀の終わりにバスク・ナショナリズムが台頭してくる。当初はビルバオを要するビスカヤで反工業化を訴えて興ったが、20 世紀に入るとギプスコアにまで広がって行く。同様に自治政府を望むカタルーニャ・ナショナリズムやガリシア・ナショナリズムと連動してもいた。

1930 年代後半になってフランコ政権下となると、バスク語の使用が禁じられ、バスクの旗（イクリニャ）の掲揚もが禁止されることになった。そうしたなか、1946 年にニューヨークでバスク亡命政府がつくられ、また 1952 年には「バスク祖国と自由（ETA）」が結成された。これにより、武力闘争も辞さないより急進的な政治的独立を求める運動が活発化していくこととなった。1975 年のフランコの死後、スペインは民主化がすすめられたが、そんななか 1978 年の憲法ではバスク 4 県のフエロ体制が回復し、また自治政府も認められ、地方自治が実現されることとなった。なお、ETA は、2017 年に完全武装解除している。

今回の在外研究では、およそこれらの歴史の痕跡と現状を確認することができ、地域の多様性についても現地を踏査することにより、より深く実感することが出来た。

■今後の展望

琉球＝沖縄の経験との比較をいっそう進めていきたい。また当初予定していたハワイ州の調査・研究も進めていきたい。そこもまた日系、沖縄系等、多くの移民から成っている複雑な社会であり、比較検討するに値するはずである。

■教育への効果

すでに 2023 年度の講義科目で、この半年で得られた成果の一部を取り入れて授業を行っている。現地で採った多くの写真や資料が、ネット等で得られるもの以上の情報を伝達できることを実感しているところである。